

江戸の祭礼と開帳

変化する都市～政治・技術・祝祭～

2008年6月4日

木下直之

「※:このマークが付してある著作物は、第三者が有する著作物ですので、同著作物の再使用、同著作物の二次的著作物の創作等については、著作権者より直接使用許諾を得る必要があります。」

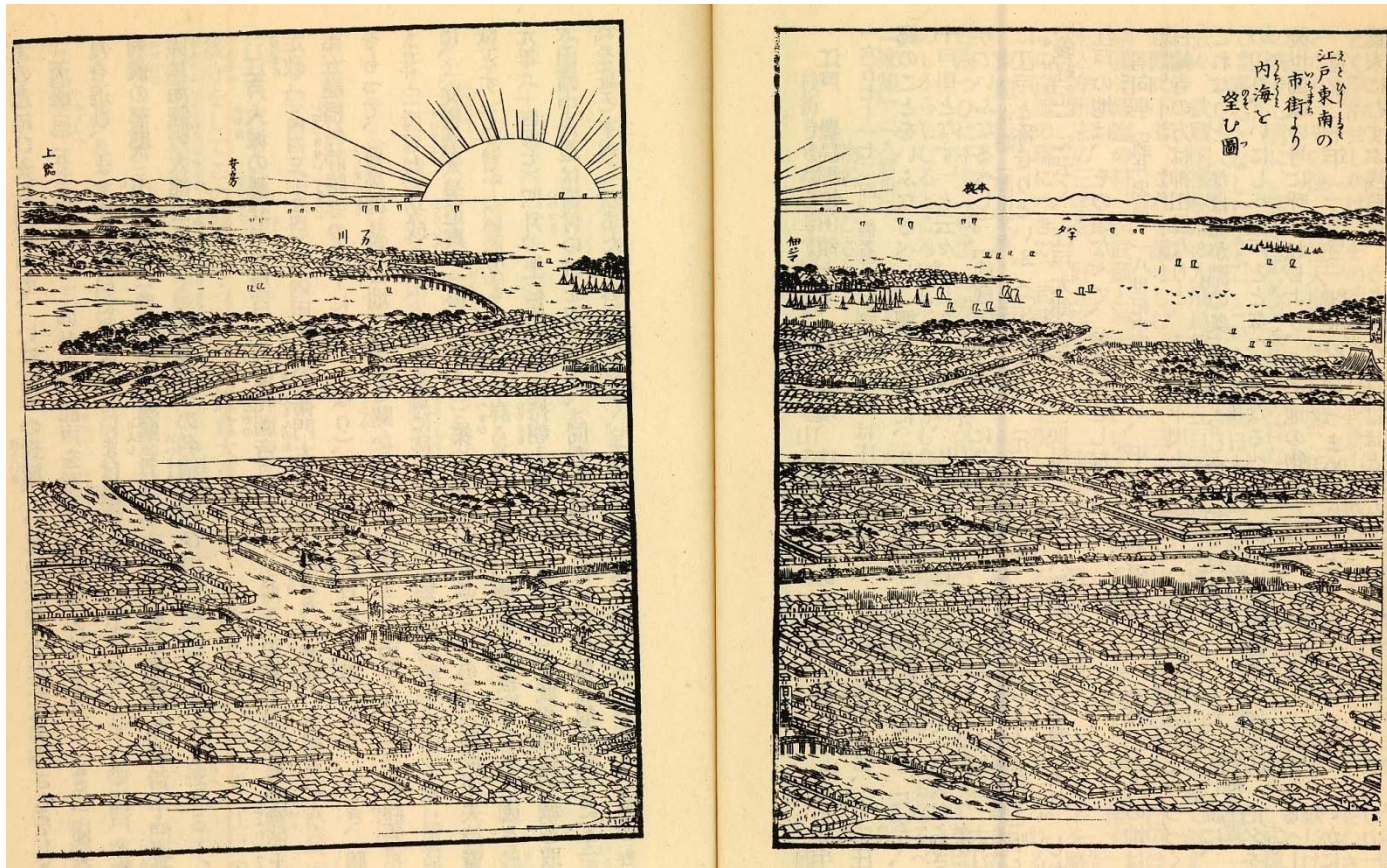
本日のメニュー

- はじめに、この講義のねらい
 - 1) 都市における仮設なるものにも目を向けよう
 - 2) 江戸から東京への変化は「仮設なるもの」に何をもたらしたか
- 初回の鈴木博之先生の講義につなげると
 - 1) 都市のコントロール
 - 2) 武家地、寺社地、町人地の一元化
- 愛宕山からの展望
- 「つくりもの」という造形表現
- 天下祭
- 開帳

『江戸名所図会』はどのように江戸を語り出すか
日本武尊東夷征伐のとき、武具を秩父岩倉山に収めたまふ。
これ武蔵国号の濫觴なり。

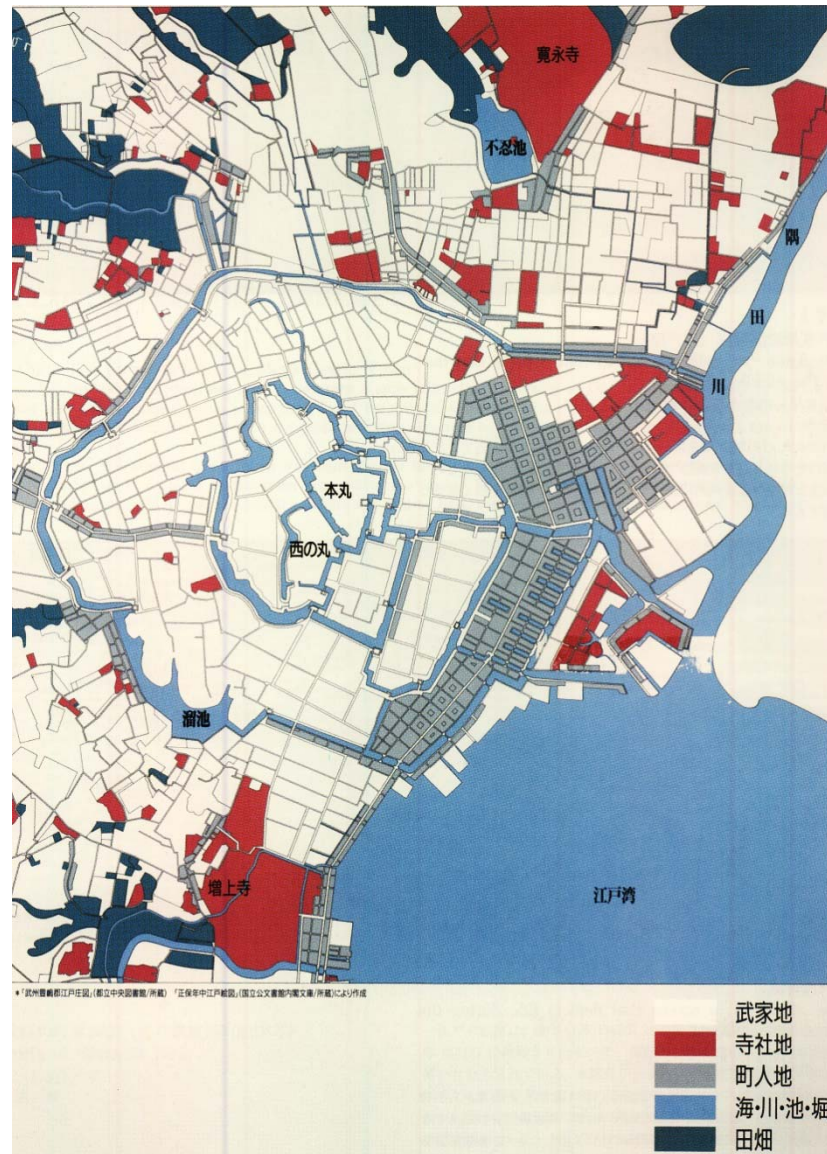


『江戸名所図会』1832年序の第2図
江戸東南の市街より内海を望む図





† 資料提供: 人文社



✚ 『図表でみる江戸東京の世界』(編集・発行 東京都江戸東京博物館、1998年)

- ・ 万国列侯の藩邸、市廛商賈（してんしょうこ）の家屋鱗差して、縦横四衢（しく）に充満し、万戸千門薨を連ねたり。実に海陸の大都会にして、扶桑第一の名境といひつべし。

『江戸名所図会』

ベアト、愛宕山より撮影、1863年頃

台場

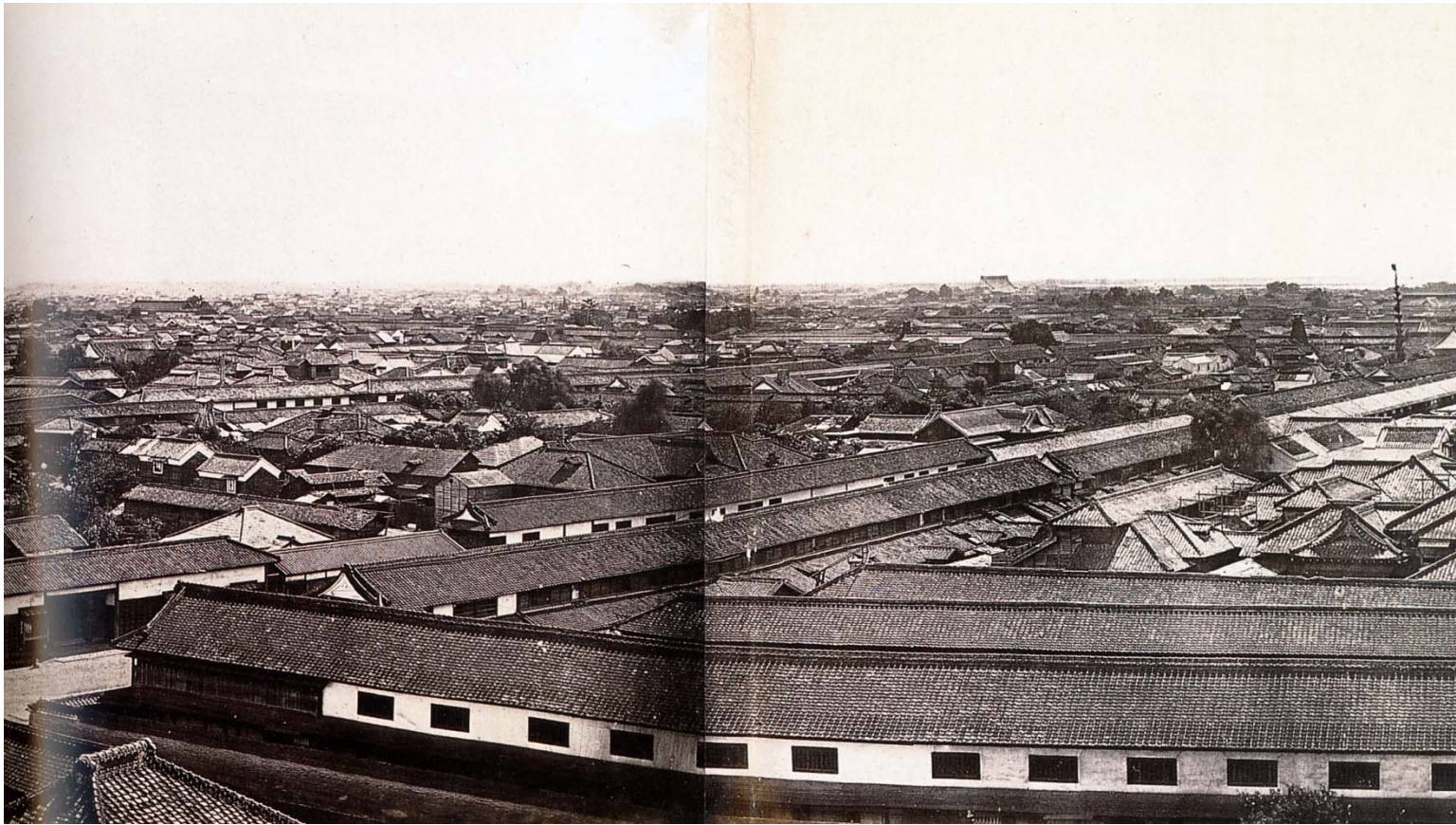
増上寺



浜御殿(のちの浜離宮)
伊予松山藩上屋敷
長岡藩中屋敷



築地本願寺
長岡藩中屋敷



エーメ・アンベール『幕末日本図絵』

われわれの目は大きな都会に注がれた。まず、南の茶店に入ったが、何よりも風景の広いことと、その輝きに目をみはった。太陽は雲のない空に沈みかけている。大気が澄みきっているので、湾のきらきら光る海面に、台場がはっきり眺められた。しかし、小山の下に、湾からずっと広がっている空間の眺望は、どこまでも続いて、果てしがない。長い道路と、白壁と、灰色の大海といった方が当たっているであろう。

アンベールは1863年6月に芝の長応寺に滞在したスイス公使
愛宕山からの眺望を描写したもの
この時、ベアトが同行したと思われる。
撮影もこの時か？

エーメ・アンベール『幕末日本図絵』

ヨーロッパの古い都市であれば、時代の異なった大建築物が特徴を示し、代々の魅力を美感にそえて、個性のある様相を呈すのに、江戸では、すべてが同じ時代で、同じ様式となっていて、大君の治政の基盤、すなわちただ一つの政道に、ただ一つの既成事実にあんじているのである。江戸は、これから歴史が始まり、大建築物が建てられる、まったくの近代都市らしい。







愛宕山



江戸城

日本橋方面

真福寺



旧長岡藩中屋敷の改造
旧武家地に商店が登場
洋風建築(旧鹿鳴館・帝国ホテル)の建設

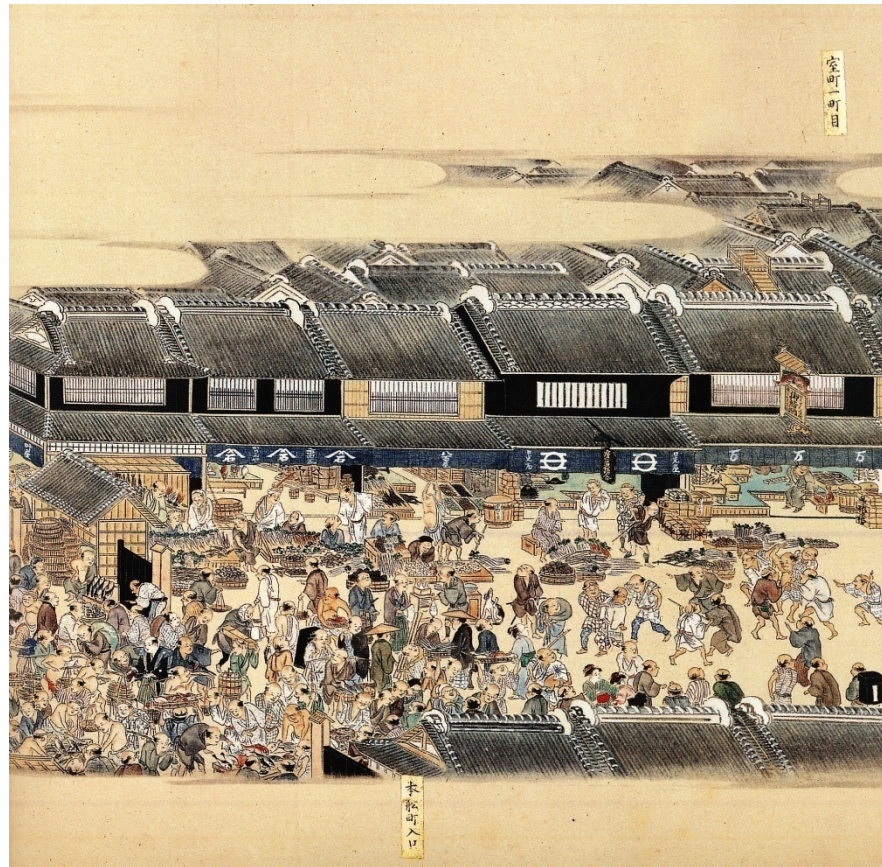


『熙代勝覧』ベルリン東洋美術館蔵
1805年(文化2)頃の景観(神田今川橋)



『熙代勝覧』

1805年(文化2)頃の景観(室町1丁目)



『熙代勝覧』
1805年(文化2)頃の景観(駿河町)



広重「する賀てふ(駿河町)」、1856年
(『名所江戸百景』)



小林清親



越後屋と為替バンク三井組



† 玉井哲雄 編『よみがえる明治の東京 東京十五区写真集』(角川書店、P.95 図6)

著作権処理の都合で、この場所に挿入されていた

図表は削除されました。



(第 57 圖)

舊三井組の屋頂に在りし鯨(側面)

昭和4年撮影

此鯨は青銅製にして、高さ4尺5寸、底面の巾1尺、長さ2尺2寸あり。



(第 58 圖)

舊三井組屋頂に在りし鯨(正面)

昭和4年撮影

鯨の正面の口が開きたる儘なるは、其の在りし位置として不思議に思はるれども、(第54圖)を見るときは口の開きたるまゝなりしが如し。



広重「市中繁栄七夕祭」、1857年 (『名所江戸百景』)



手前は京町・南伝馬町の
「四方蔵」か

堤(薬種)

山崎(酒)

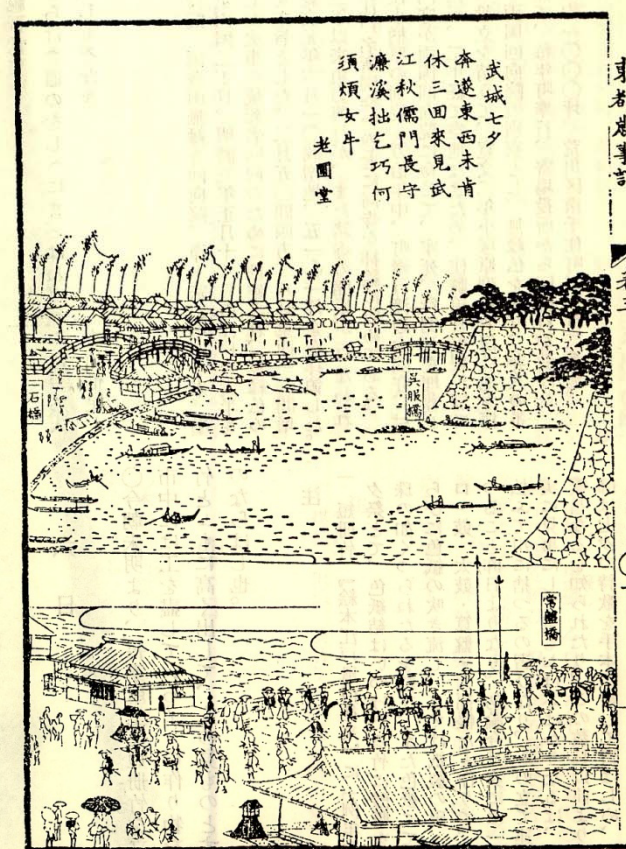
太刀伊勢屋(紙・茶・両替)

堺屋(薬種)

火の見櫓は八代洲河岸の火消屋敷

※原信田実『謎解き「江戸百」』
集英社新書ビジュアル版、2007

齋藤月岑『東都歳時記』、1838年(天保9)



七月六日

今朝未明より、每家屋上に短冊竹を立てる事繁く、市中には工を盡していろいろの作り物をこしらへ、竹とともに高く出して、人の見ものとする事、近年のならはし也

斎藤月岑『東都歳時記』、1838年

七夕祭

例年七月七日は七夕祭とて、色紙結わい付けたる竹に酸漿(ほおずき)を幾個となく数珠の如くつらねたるを結び、また色紙にて切りたる網ならびに色紙の吹き流し、さては紙製の硯・筆・西瓜の切口・つづみ・太鼓・算盤・大福帳などをつりて、高く屋上に立つること昨日よりなり。もちろん今日夕には一本残らず取り払うて川に捨つるの習いなり。その立てつらなりし様は実に見事にして空もおおうばかりなるは、大江戸の太平、繁昌なるを知られたり。

菊池貫一郎『絵本江戸風俗往来』東陽堂、1905年

触書、1841年(天保12)

例年七月七日、七夕祭と唱、笹江短冊を附差出候者、前々より之儀二候処、近年大行之造り物、又は如何敷造物等、町屋屋根上等江差出、年々増長致し候由、短冊竹江付候位之小き品者苦々間敷候得共、短冊竹之外二格別大行之造り物等、今般厚キ 御趣意茂有之候儀二付、不可然哉……(後略)

南北

小口年番

世話掛り

丑六月廿八日

石井良助・服藤弘司編『幕末御触書集成』5、岩波書店、1994年

触書、1842年(天保13)

近来神仏開帳之節、境内或者盛り場等へ大造之見世もの等差出候間、自ら群集いたし、喧嘩口論不絶候、既ニ寛政十一末年触流候趣も＜有之＞候間、造物奉納致、大造之見せ物等差出候儀ハ、神仏崇敬之意ニ違ひ、不埒之事ニ候、以来開帳之節、不謂新規ニ大造之造り物、或者見せ物等致候儀ハ、決而無用ニいたすへく候、右之通、文政十亥年五月相触置候処、猶又近来大造之造り物いたし候趣も相聞＜候＞、此節追々開帳も有之候処、今般厚御主意被仰出候ニ付、若心得違之もの於有之＜者＞、吟味之上、当人者勿論、町役人共迄も急度咎可申付候、名主支配限り早々申通、町々之ものへ厚く可申聞、

右之趣、町中不洩様可相触候・・・(後略)

町年寄

二月廿八日

役所

石井良助・服藤弘司編『幕末御触書集成』5、岩波書店、1994

広重「金杉橋芝浦」、1857年(安政4年7月)
(『名所江戸百景』)



七月九日より、六十日の間、深川浄心寺に於て甲州身延山祖師七面宮開帳(参詣群集し、毎朝未明より開門を待て参詣す。講中の輩、神事の時持出る万度といふものの如く、思ひ思ひの行燈をつくり、燈火を点じてこれをつぎ、群をわかちて一様の衣類を着し、太鼓を打、題目を唱へて往来する事たへず)。

斎藤月岑『武江年表』

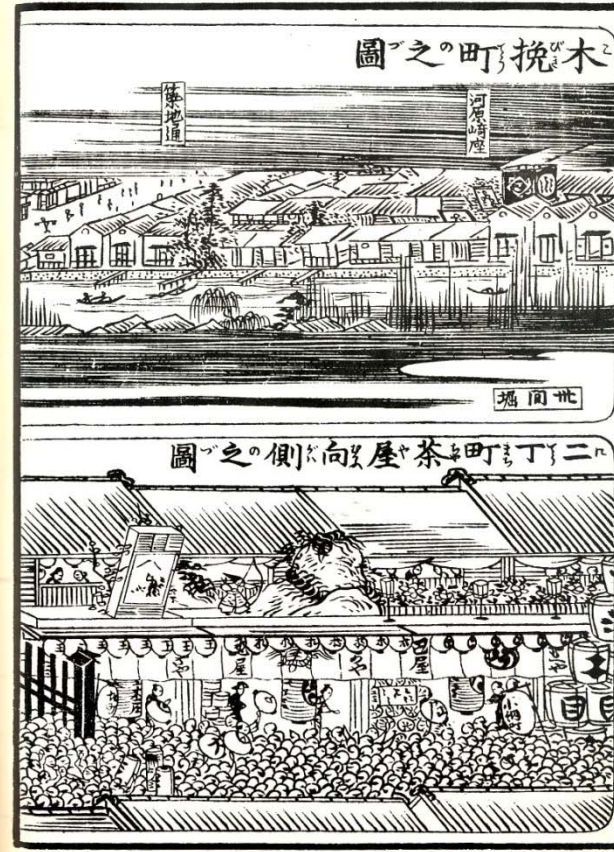
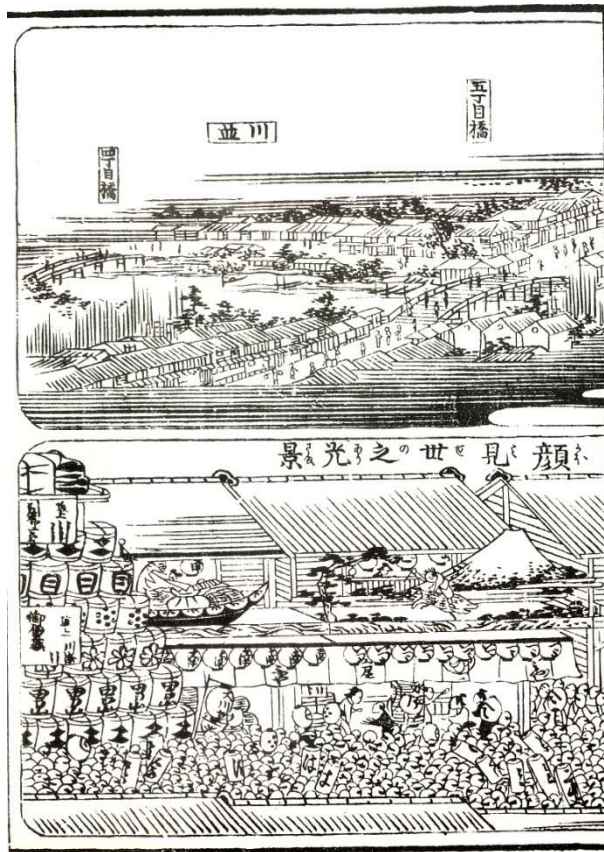
万度、万燈(まんどう)＝木の枠に紙を張り、下に長い柄をつけて捧げ持つ行灯

十月晦日、三芝居の町内茶屋飾物あり。今日より霜月顔
見世狂言の始るまで、家々庇上より大屋根軒に至るまで
に、種々風流の造り物を飾り、夜にいたれば燈燭を煌す。
鼯鼠連よりは引幕水引幟等夥しく送り、酒樽瓶桶米炭俵
にいたるまで山のごとく積物とし、めざましきまで賑へ
り・・・（後略）

斎藤月岑『東都歳時記』、1838年

『戲場訓蒙図彙』、1803年(享和3)

木挽町之図、二丁町茶屋向側之図、
顔見世之光景



木挽町から猿若町へ 天保の改革で芝居移転



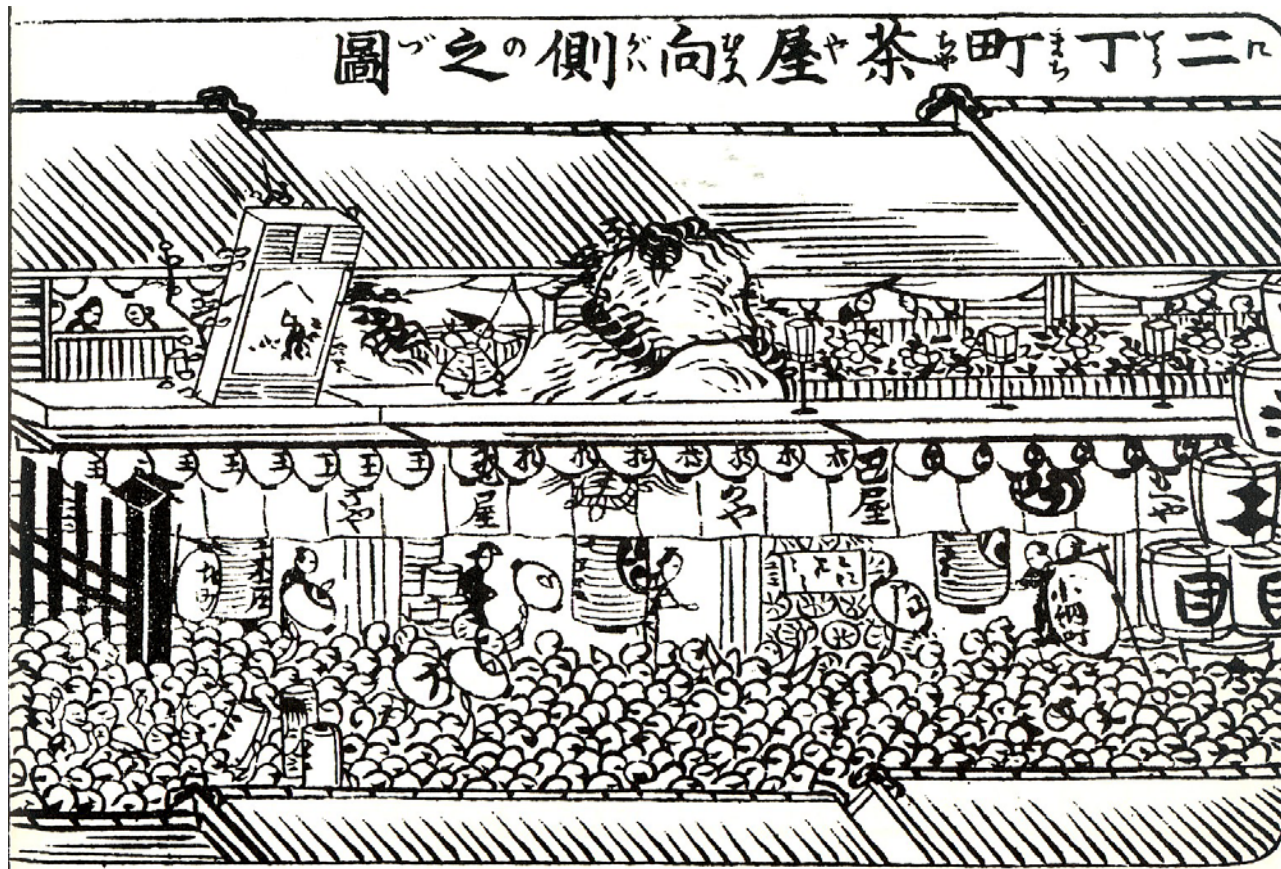
† 資料提供: 人文社

広重「猿わか町よるの景」、1856年(安政3年9月)
(『名所江戸百景』)





『戯場訓蒙図彙』1803(享和3)
二丁町茶屋向側之図、顔見世之光景



山三社総路姫





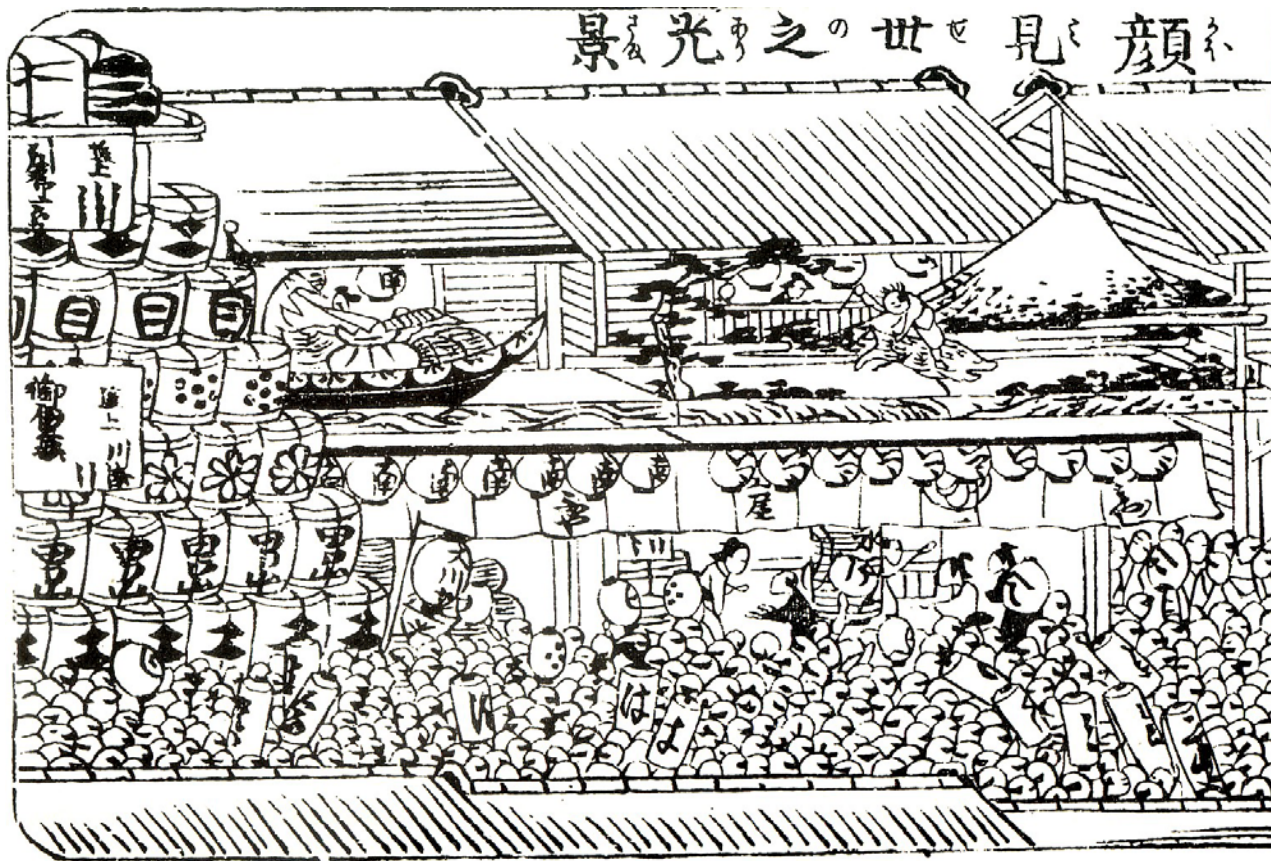
大正二年十月一日ヨリ七日間執行姫路總社廿一年目臨時大祭紀念物造實況

(物造祭大山ツー)
戦合獄ヶ賤町の平

秀吉公
陣屋
佐久間
鬼玄
討入
戦合獄

『戲場訓蒙図彙』、1803年(享和3)

二丁町茶屋向側之図、顔見世之光景



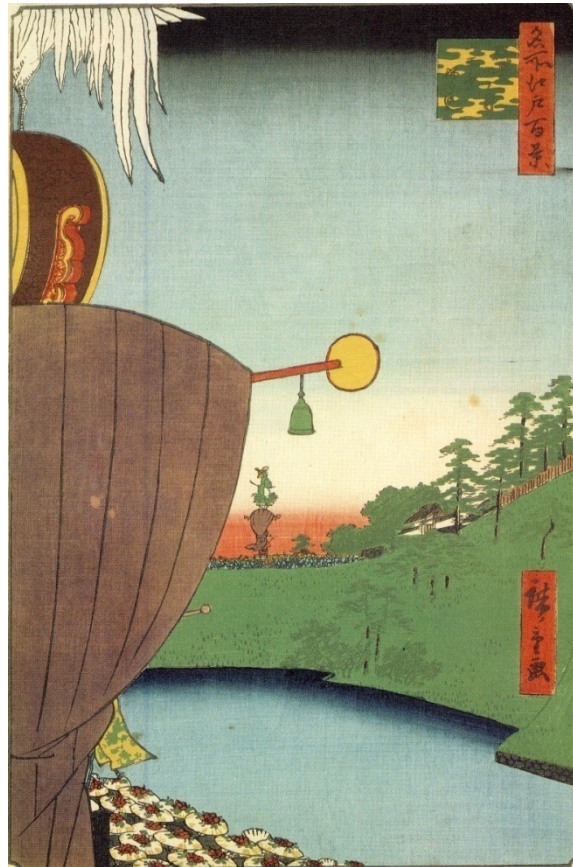
歌舞伎座と積物



鶴岡八幡宮、鎌倉

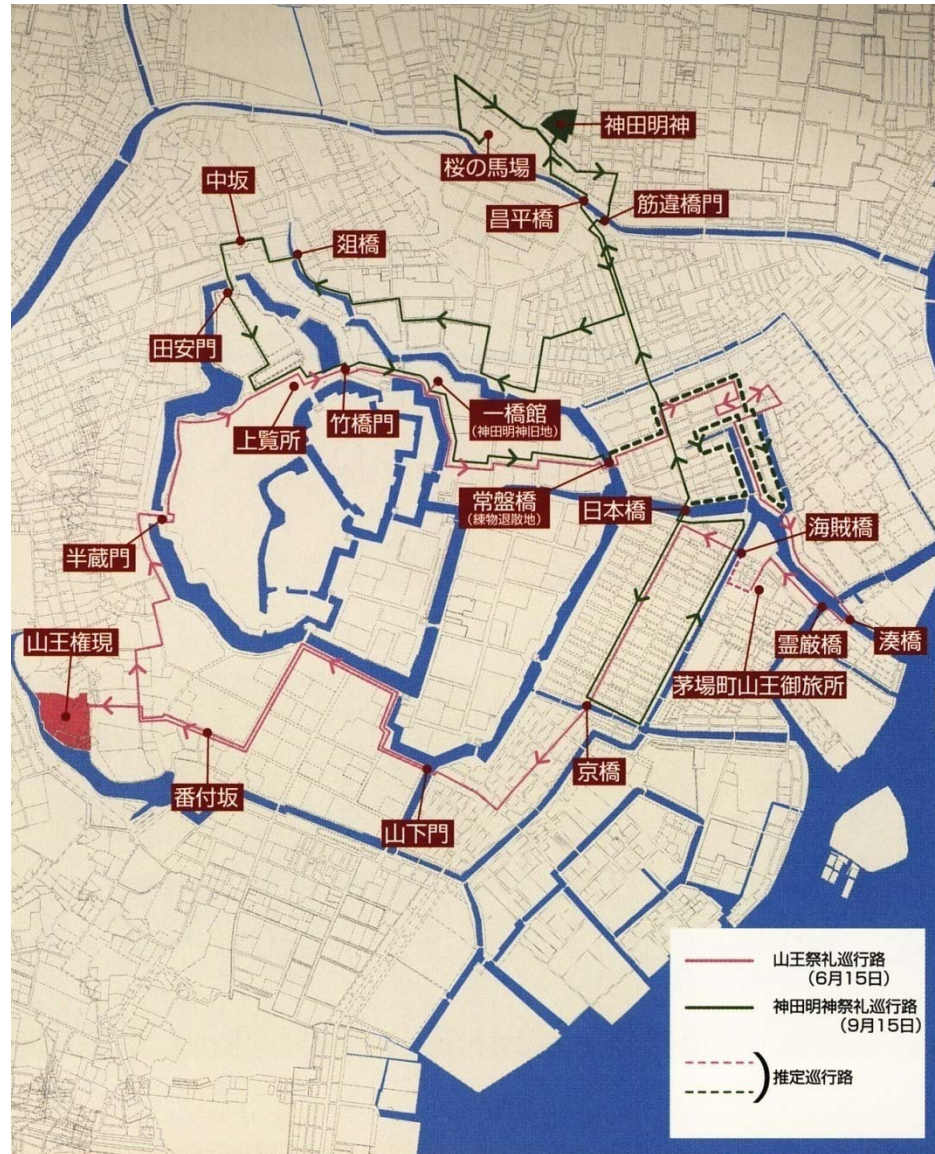


広重「糰町一丁目山王祭ねり込」、安政3年(1856)
(『名所江戸百景』)



芳員「神田祭出づくし」





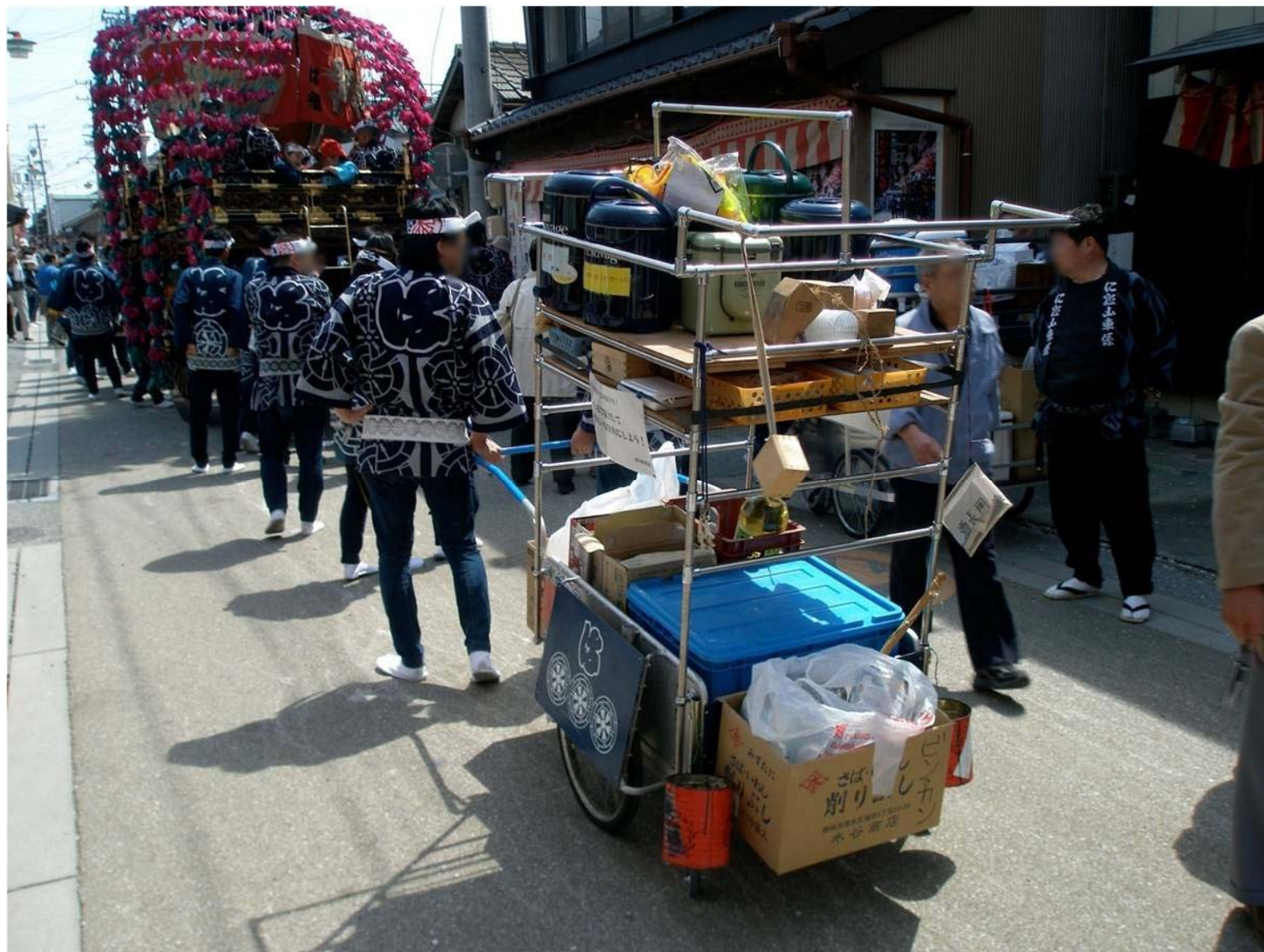
† 『大江戸八百八町』(編集・発行 東京都江戸東京博物館、2003年)

「神田明神祭礼絵巻」神田神社蔵
三河町1丁目僧正坊牛若の山車









遠州横須賀、三熊野神社大祭 2008.4.5











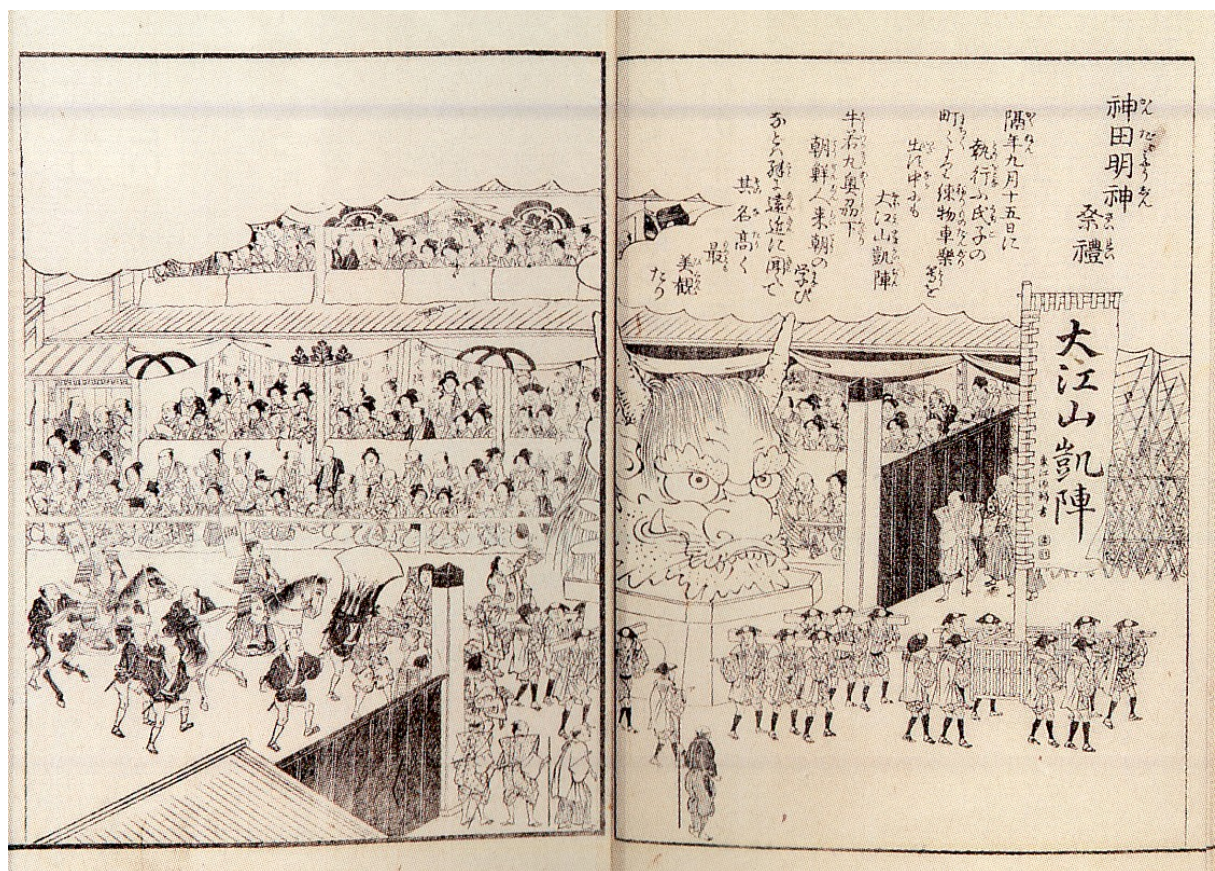


『神田明神祭礼絵巻』、1793年(寛政5)か
竜ヶ崎市歴史民俗資料館蔵



『江戸名所図会』、1836年(天保7)

「神田明神祭礼」



「神田祭に鬼の首」



神田祭神幸祭巡行図

2007.5.12



『朝日新聞』、2007.5.13
「神田祭鬼戻る」

著作権処理の都合で、この場所に挿入されていた

図表は削除されました。

神田祭附祭復元プロジェクト

大江山凱陣参加者記念写真

2007.5.12

